

群 教 セ	F08 - 01
	平14.210集

一人ひとりが存在感を 実感できる学級づくり

— 自分や友だちのことを理解する
諸活動の実践をとおして —

特別研修員 細矢 克明 (沼田市立薄根中学校)
共同研究者 伊藤 亜矢子 (お茶の水女子大学)

《研究の概要》

本研究は、中学1年生を対象に、一人ひとりが存在感を実感出来る学級環境を築いていくための支援の工夫を追究したものである。自己理解から他者理解、そして相互理解へとつながる体験を積み重ねることによって、互いのよさを再発見し、認め合えるような場づくりの実践を行った。その結果、生徒はお互いの気持ちや行動を理解し、互いに認め合い学び合えるような姿勢が見られるようになってきた。

【キーワード：生徒指導 教育相談 中学校 自己理解 他者理解 エゴグラム】

主題設定の理由

本校は、一つの小学校から全員が入学してくる。そのため、同級生はもちろん、先輩の2、3年生にも多くの友人をもっている生徒が多い。小さいときからの知り合いが多いということは、新しい中学生活にも安心感や連帯感を与えている。

一方、幼稚園や小学校からずっと一緒だったということは、学習や運動の優劣、生活面における行動範囲などに序列関係を作り出し、友だちを見る目も固定的になってしまっている。そして、こういったことから、自分よりも弱いと感じる人間をからかってしまう傾向も見られる。また、友だちのよさに気づこうとする意識は低く、友だちの行動を認めたり、友だちから何かを学んだりする姿勢もあまり見られない。

こういった小学校時代にある程度できあがってしまった友だちに対する固定観念が、友だちのよさの発見を見逃したり、交流関係も浅く狭めてしまっていると考えられる。そして、こういったことは、健康的な学級集団としての発展を妨げる恐れがある。また、まじめに学校生活を送っているが、自己表現等がうまくできず集団にうまく溶け込めないような生徒を阻害し、いじめ等に発展させてしまう可能性もある。

そこで、自己理解から他者理解、相互理解へとつながる体験を学校行事や普段の授業の中に意図的に取り入れ、それらの体験を積み重ねることによって、友だちのよさを見つけ出せる場を築いていきたい。そして、こういったことをとおして、互いが認め合い、学び合えるような学級風土を作り上げ、ひいては一人ひとりが存在感を実感できるような学級集団にしていきたいと考え、本主題を設定した。

研究のねらい

本研究は、自己理解から他者理解、相互理解へとつながる体験を積み重ねることによって、互いのよさを再発見し、認め合い学びあえるような環境を築いていけることを明らかにする。

研究の内容及び方法

1 研究の内容

(1) 互いが認め合い、学びあえるようになるには

相互理解の基盤として、自己理解があげられる。自己を素直に、そして謙虚にみつめられるようになって、はじめて他人を客観的にみることができるようになるのではないだろうか。自己理解を図る一手段として、エゴグラムを活用していきたい。エゴグラムから、まずは自己の行動パターンを知り、それをもとに、一人ひとりが存在感を味わえる学級になるために何かできることを考えさせたい。そして、その考えは、まわりの友だちとの話し合い活動をとおして再度見直しを行う。こうしてできあがった課題を遂行していくにあたっては、各自の定期的なチェックに加え、友だちからの考えを聞く場も定期的に設けることによって、互いの気持ちや考えを知る機会を増やしていけることになるであろうし、こういったことが深まると互いを認め合える場も必然的に生まれてくるであろう。また、人を認めるということは、その人のよさを知ることから始まるのではないか。ところが、日頃からよさに気づこうとする気持ちが薄かったり、何がよいことであり価値あることなのか正しく判断できなかつたりすると、人のよいところを知るなどということはかなり難しいことになると思う。こういったことから考えると、よさに気づこうとする姿勢を日頃から育てていくこと、何がよいことなのか見極められる力を培っていくことが必要であろう。そして、そういった体験等を積み重ねることによって、友だちのよさに気づき、その人を認めていけるようになるのではないか。また、それらのことがさらに一步深まると、友だちから学び取るという方向にも広めていけるものと考えられる。

(2) 一人ひとりが存在感を実感できるような学級集団とは

一人ひとりがお互いのよさを知り、その人を認められるような動きが学級に浸透してきたとき、学級における存在感を実感できるようになってくるのではないかと考える。そして、学級全体がそういった方向に向いたとき、一人ひとりが存在感を実感できるような学級集団に近づいたといえるのではないだろうか。



2 研究の方法

(1) 研究の対象 中学校1年 32名

(2) 研究の実施方法

—— 日常の学校生活の中で ——

○道徳・特活・社会の授業及び短学活

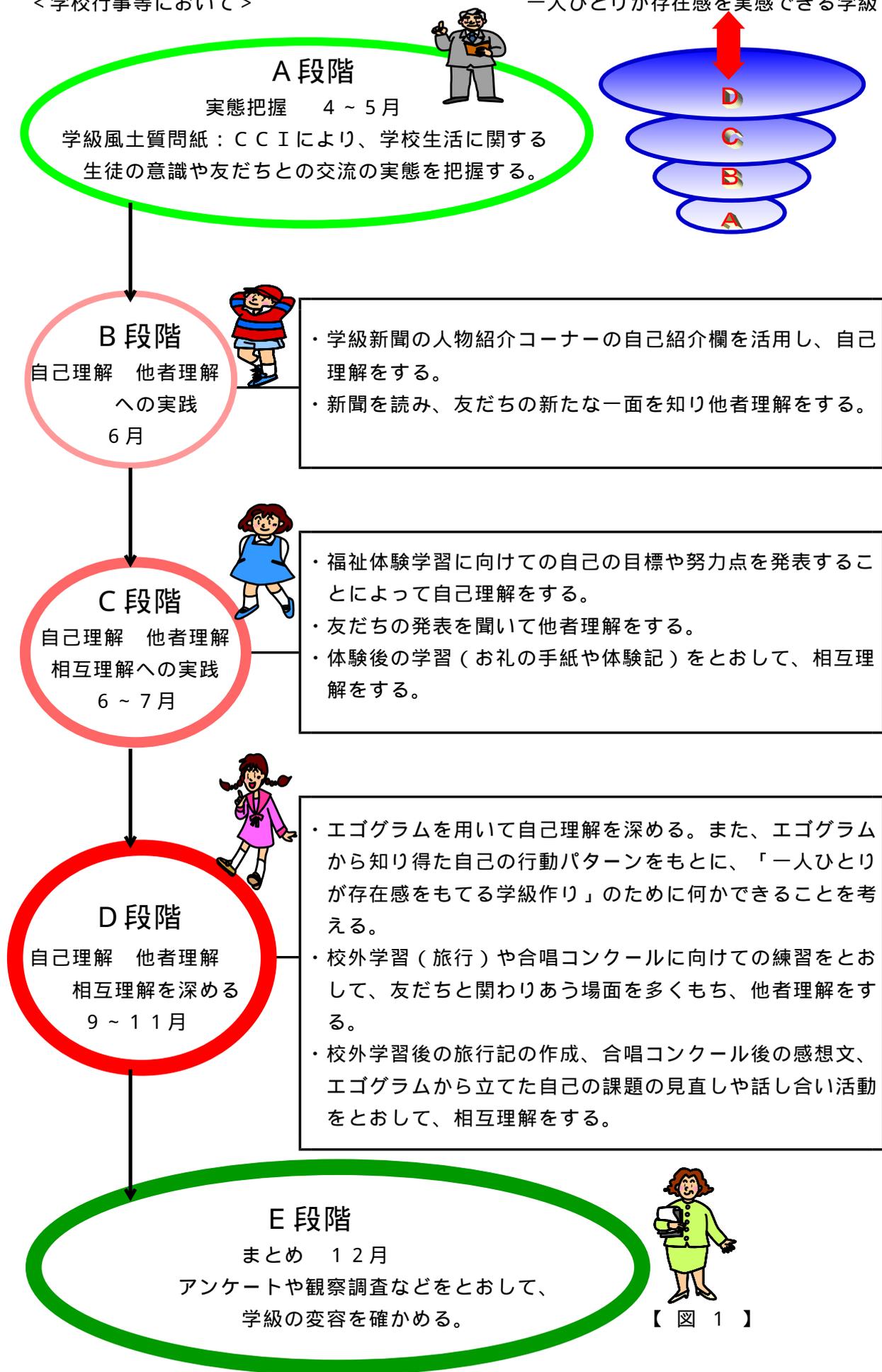
話し合いやグループ活動を適宜取り入れ、友だちの考えを聞く機会を増やすとともに、聞く姿勢を育てていく。また、だれもが発言しやすい雰囲気を作り出し、特にグループのとき等は全員の考えを聞いてから、まとめ等を行えるよう徹底していきたい。また道徳・学活・短学活では、日常の行動の中に価値あるものがたくさんあることに気づかせたい。

○委員会や学級の係、日直や清掃・給食などの当番活動

いつも行っている活動の中には、価値ある行動をしてくれている生徒が必ずいるものである。そういった生徒を見逃さないように留意し、機会を見て短学活や学年集会でさりげなく他の生徒に紹介できるようにする。

○生活全体にゆとりをもてるような配慮や工夫

多くの活動の基盤になると思うが、ゆとりがないと素直な気持ちで物事に対処できないことが多い。人のよさに気づいたり、物事を正しく判断しようと努めたりするには、やはり心にゆとりがないとできないことだと思う。従って、生徒の多くがそういった環境で学校生活を送れるような支援を工夫していく。



(3) 研究の有効性の吟味

本研究の有効性を以下の観点及び方法で確認する。

自己理解及び他者理解を進めることができたか。(エゴグラム、個々の課題のチェック及びグループでの話し合い)

友だちのよさに気づき、親交を深められたか。(体験活動後の感想、個々の課題に対するグループでの話し合い、行動観察)

実践の概要及び結果と考察

1 学級風土質問紙 (CCD)調査・・・A段階



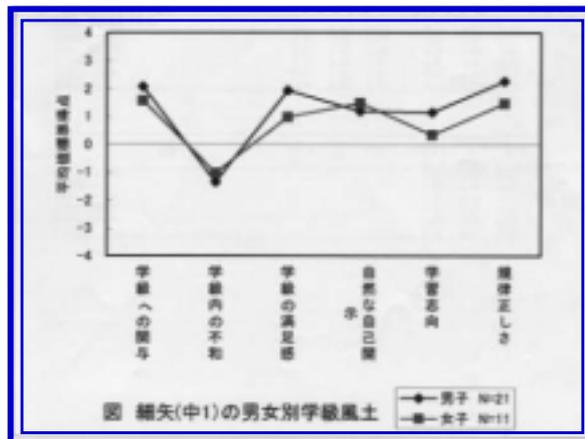
生徒の実態を客観的に把握するために、伊藤亜矢子による学級風土質問紙調査を実施した。その結果を集計し、伊藤により分析・処理してもらった結果、次のような3点が指摘された。

○学級の満足感において、生徒は現状に大きな問題はないと感じているので、個々人を深く知り合うことも必要かもしれない。

○やや教師主導で生徒には幼さもある。

○男女とも問題意識を高めて、自分たちなりの問題解決方法を見だし実行できるようなスモールステップが必要かもしれない。

個々のよさ等を知ることによって、その人の存在を素直に認められる。教師主導が強いと自ら進んで問題を解決しようとする力は伸びてこない。自ら進んで問題解決法を見だし実行できる力がついてこない、現状しか見られない状態に停まる可能性が高く、どうしても固定的・一面的に物事を見てしまいがちになり、友だちのよさの発見などは少なくなってしまう。つまり、これら3つの指摘は「一人ひとりが存在感を実感できる学級づくり」を進める上で、生徒並びに教師が克服すべき課題と合致する。



2 学級新聞「キラキラDAYS」の活用・・・B段階

【 図 2 】

図3のような学級新聞を、毎月発行している。8月号からは、自己理解及び他者理解を進めるために人物紹介コーナーを取り入れ、自分や友だちを知る機会を設けてきたが、このことについての生徒の反応は以下の通りである。

- ・人物紹介コーナーができて、友だちのこと(趣味やコメント)が分かっていいと思う。
- ・誕生日も書いてもらおうとよい。コメントはパターン化されないように書いてほしい。
- ・相手の知っていた所、初めて知ったこと、そういうのがあっていいと思う。新聞にのるのは恥ずかしいけど、自分のことを周りの人たちに分かってもらえるからうれしい。
- ・あまり話さないような人の趣味や特技などが分かっていいと思う。でも、自分の写真を貼るときは、ちょっと照れ臭い。
- ・とっても工夫してあってよいと思う。今はこれで満足。今まで分からなかったことが人物紹介で、人の長所が見つけれられると思うので、いいと思います。
- ・人物紹介はいいと思うが、コメントをもう少し増やしてほしい。なぜかといえば、その人が、今こんなことを考えているんだと分かって、もっと友だち関係が深まると思うからで

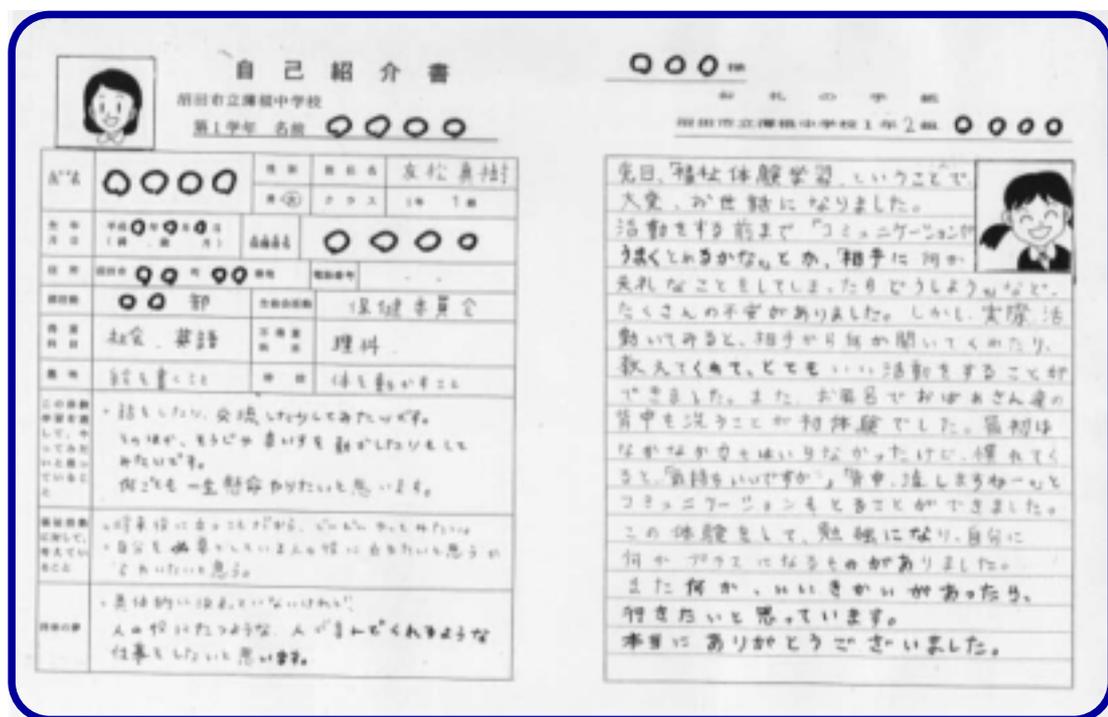
す。続けて下さい。

- ・人物紹介コーナーは、自分としてはなかなかよいと思う。できれば全員やってほしい。



【 図 3 】

3 福祉体験学習・・・C段階



【 図 4 】

体験学習の事前学習や事後学習において、自己紹介書（事前）やお礼の手紙（事後）を作成し、それを5～6人のグループ内で発表したり内容を確認したりした結果、自己の一端を知るだけでなく、友だちのことも知る機会を設けられた。また、「あの人のことはよくわからなかったけど、けっこういいこと考えてるじゃない」とか「なあんだ、お互い似たようなこと考えてるんだね」等のつぶやきもみられ、お互いを理解しあう場面も築くことができたと思う。

4 エゴグラムの活用・・・D段階 < エゴグラムは新井浩之 中学生用行動エゴグラム >

相互理解のための、基盤としての自己理解を図るために、エゴグラムを活用した。エゴグラムから、まずは自己の行動パターンを知り、それをもとに、「一人ひとりが存在感をもてる学級づくり」を進めるために、何ができるかを考えた。自己の課題づくりにあたっては、エゴグラムの質問項目の中で「よくできている項目」か「ぜんぜんできていない項目」のどちらかに注目させ、現在のよい点を伸ばしていくか現在のよくない点を克服していくかのどちらかで考えさせた。その後、個々の考えを6～7人のグループで話し合い、修正もしくは訂正するという見直しの場を設けた。その結果は表1のとおりである。また、この課題を遂行していくにあたって、定期的に個々にチェックしたり、グループで話し合わせたりしながら、課題達成を目指すと共に、互いの気持ちや考えを知る機会を増やしていった。

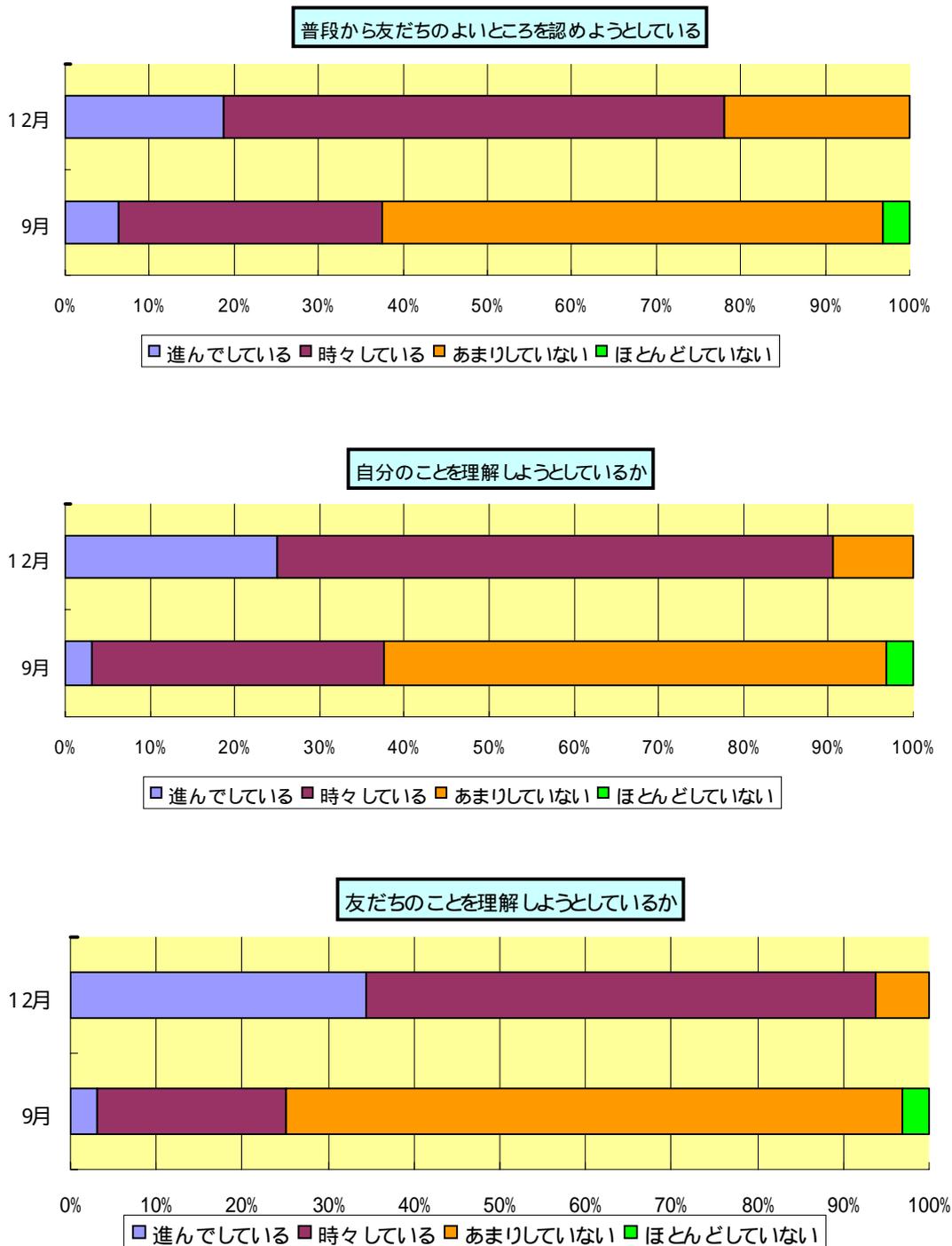


【表1】《個々の課題》

番号	生徒が考えた個々の課題
1	何かを決めるときなどは、自分で考えた意見をできるだけ言うようにする。
2	困っている人やつまらなそうな顔をしている人がいたら、話しかけて悩みを聞く。
3	相手のことを考えて、会話をするようにする。
4	真剣にやるときは真剣に、ふざけてよいときは楽しむなど、場にあった行動をする。
5	友だちと助け合いながら、仲良くしていきたい。
6	いつでも元気よくあいさつをし、クラスを明るくできるようにする。
7	どんな友だちとも仲良くする。
8	忘れ物を無くして、宿題を期限までに出すようにする。
9	自分の意見をしっかりと持ち、しっかりと言う。
10	気の合わない友だちでも、いいところをみつけて認めようと努力する。
11	何かがきっかけで喧嘩になったときは、どんな理由でも自分からあやまる。
12	友だちとなかよく遊ぶ。遊ぶときにふざけすぎない。
13	あいさつなどを自分から大きな声でして、クラスの雰囲気盛り上げたい。
14	悪口を言わない。
15	良いこと、悪いことの区別をしっかりとる。
16	何かを決めるときは良く考える。みんなのことを考えてものを言う。
17	困っている人がいたら進んで声をかけるようにする。
18	良いこと、悪いことの区別をしっかりと考えて行動する。
19	気の合わない人とも仲良くできるようにする。朝来たら、毎日窓を開ける。
20	気の合わない友だちでも、無視をしないで良いところを見つけて認めようと努力する。
21	困っている人がいたら、積極的に自分から協力する。
22	授業中に進んで意見を言う(みんなの役にたちそうなこと)。
23	友だちの中に入れたい人がいたら仲間はずれにならないように進んで声をかける。
24	掃除や係の仕事を今まで以上にちゃんとやる。
25	あいさつをしっかりとし、だれとでも公平に話をする。
26	授業中にうるさくしている人がいたら、できるだけ注意する。大きな声で挨拶する。
27	いろんな人にあいさつをしたり、声をかけたりする。
28	仕事を見つけて積極的に行動する。誰にでも公平に話をする。
29	困っている人がいたら、進んで助けてあげる。
30	自分から進んで仕事などをする。
31	気持ちよくすごせるように、ごみなどがあつたら拾って捨てる。
32	誰とでも公平に話をし、まわりの人の話をよく聞いてあげる。

1～21は男子。22～32は女子。

5 学級の生徒に対するアンケート…D段階

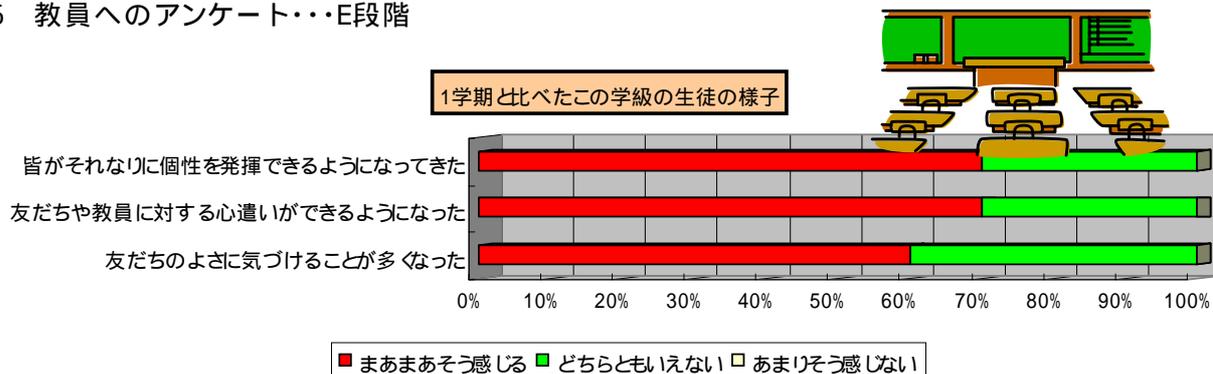


【 図 5 】



図5の結果をみると、生徒は以前より自分や友だちに対する意識が高まってきているように思われる。また、自己理解や他者理解に対し、積極的な姿勢がみられるのは、学級全体の二割から三割程度の生徒である。他のほとんどの生徒は、その時々により自分や友だちの見方が異なってしまうと答えているが、こういった生徒も少し前までは、どちらかというと消極的な姿勢であった。このようなことから、自分や友だちのことを知る機会を意図的に与えたことは、自分や友だちのことを理解するために全般的には効果があったと思うが、まだそういったことに対し曖昧な生徒も多く、継続した支援が必要である。

6 教員へのアンケート…E段階



【 図 6 】

本学級の授業に常時関わりをもつ教員10名にアンケートを実施したところ、図6のような結果となった。この結果をみると十分とはいえないが、生徒は人の気持ちや立場を考えた行動がとれるようになってきたように思える。また、よい意味で個性を發揮できるようになってきたことから、一人ひとりがのびのびと学級の中で生活できるような環境ができあがってきたのではないかと考える。

その他の意見としては、次のようなことがあげられた。

以前と比べて、ストレートできつい言葉が少なくなってきた。

友だちの意見などをしっかり聞こうという姿勢が見られるようになってきた。だが、数名の生徒は、まだやや心配なところもある。

研究のまとめと今後の課題

地道な実践であったが、似たようなことを繰り返し続けてきた結果、少しずつではあるが、生徒に変容が見られるようになってきた。自分のことをある程度理解した上で、相手の気持ちや立場を考えた行動がとれるようになってきた生徒が増えてきたように思う。また、学級内の小さなめめごと減り、学級会などで意見を言う生徒も多くなってきている。学級が以前より、居心地がよい空間になってきているのではないかと考える。このようなことから考え、自己理解から他者理解、そして相互理解へとつながるような体験を繰り返し続けてきたことは、一人ひとりが存在感をもてる学級風土を築くために、有効なものであった。

しかし、比較的素直に指導に従える1年生ということもあり、どこまでしっかり理解して行動できているのかは、まだよく分からない部分も多い。従って、今までの実践を継続していくとともに、変容の様子や内容を今後もしっかり確認していくことが大切であろう。また、自己理解から他者理解、そして相互理解という過程をへて、さらに一歩進んだ自己理解、他者理解と螺旋状に深めていけるような支援も必要であろう。

< 参考文献 >

- ・ 榎本博明著 「自己」の心理学 サイエンス社（1998）
- ・ 会沢信彦他共著 教師のための児童・生徒理解 八千代出版（1999）
- ・ 新井浩之 『平成10年度長期研修員（B）研究報告書第179集』
群馬県総合教育センター（1999）

< 共同研究 >

- ・ 伊藤亜矢子 学級風土質問紙